壱元参新聞（イチモトサン新聞）

平成18年9月 第四号
～発行～福生市立中央図書館

みんなのオススメ本！

紹介した本はすべて、福生市内の図書館に所蔵しています。

学園キノ
作 時雨沢恵一
出版社 メディアワークス

『キノの旅』のキノではない木乃と言葉を話す携帯ストラップ・エルメス。題名どうり学園物かと思ったら…戦闘物！？

『キノの旅』を知ってる人も知らない人も楽しめる本だと思います。おもしろいと思った人だけがおもしろい『学園キノ』ぜひ読んでみて下さい。

日本沈没（上下）
著者 小松左京
出版社 小学館

この夏、公開した映画の原作です。

深海潜水艇の操縦者・小野寺は、地球物理学者の権威・田所博士とともに日本の海溝の底で起きている深刻な異変に気付く。

四〇〇万部を記録したベストセラー小説を、読んでみてください。

アルテミス・ファウル ～妖精の身代金～
作 オーエン・コルファー
訳 大久保 寛
出版社 角川書店

有名な犯罪一家に育った十二歳の天才少年、アルテミス・ファウルは妖精の存在を確信し、妖精がもっている黄金を奪おうと企む。だが地下で暮らす妖精は魔法が使える上に人類を超える科学技術を持っていた！このシリーズは難しいので一気読みするのは大変かも？

すいかの匂い
作 江國香織
出版社 新潮社

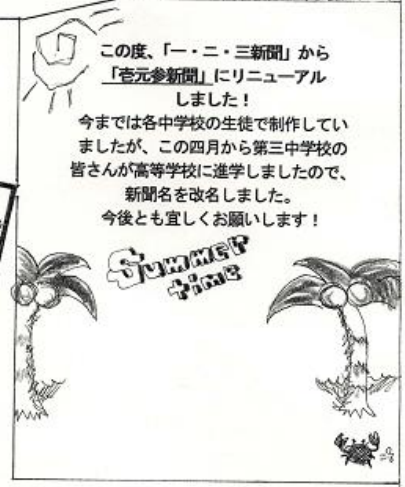
ある小さな家で出会った、上半身を共有した男の子二人。太ももに貼られた小さな蝶のシールの女、べったりとした杏ジャムの入ったジャミパン。そしてすいかの匂い。

これは、十一人の少女達が出会った、ある夏のかけがえのない記憶の物語です。著者は、映画「東京タワー」や二〇〇四年の「号泣する準備はできていた」で直木賞を受賞したことでも有名な女性作家、江國香織さん。自分の夏の思い出と照らし合わせながら読んでみて下さい。

この度、「一・ニ・三新聞」から「壱元参新聞」にリニューアルしました！

今までは各中学校の生徒で制作していましたが、この四月から第三中学校の皆さんが高等学校に進学しましたので、新聞名を改名しました。

今後とも宜しくお願いします！



神様のアシアト　第二回

青すぎる空と山。そしてくるったように鳴くせみ…。私はそれまで上を見ていた目線をふと下にやった。正門からさほど遠くないところに大きい桜の木が一本立っている。

そのまわりには木でつくったようなサクでぐるりと囲まれていた。この町の唯一の親光スポットの一本桜である。開いた話によれば千年は生きているとか。私の住んでいるところは三六〇度山がつらなっていて歩いていればはじいさんばあさんが多いし、とくに自慢できる場所ではない。なのでこの桜は町のシンボルとして住民たちに大切にあつかわれている。

ふわりとした夏の生あたたかい風を頬いっぱいにあびながら私はそっと目を閉じた。

「しのちゃん。」

その言葉を聞くと重いまぶたをあけたと同時ににこっりと笑っている女の子が視界にはいってきた。

「何？杏奈。」

杏奈と呼ばれた女の子は授業中にもかかわらず後ろを向いて今まさに友達にはなしかけようとしていた。

（次号に続く）

小説　第二話

亜佐美

時は、二十一世紀になりたての頃に遡る。

「いやだ。行きたくない」

この日の朝は最悪だった。昨日映画で泣いたせいで、目はびっくりする位にはれている。いつもの母親の怒鳴り声も、今日はまた格別にうるさい。おまけに何日か前に切った髪も寝癖でボサボサだ。

「そんなに新しい学校がいやなの？」

「・・・・・」

大体、引越しなんて、最初からいやだったのだ。

何故、せっかく住み慣れた北海道をはなれ、東京に越して来なければならないのか。何故、よりによって小心者で、人見知りの激しい私にこんな試練を与えてくるのか。

この時は、全てが謎だった。

「京子ちゃん、休み時間の時に急にバターンって、倒れちゃったんだよ。皆びっくりしてた。あ、でも一番びっくりしたのは京子ちゃんだよね。本当に覚えてないの？」

慣れた手つきで林檎をむきながら、ものすごい早さでしゃべり続ける。

「うん・・全然」

一方の私はドギマギして、あまり上手く返事が出来ない。

「全然かぁ、あ、それでね」

恵ちゃんって子が慌てて先生呼んで来て、救急車が来たの。周りは大騒ぎだったし、本当はその時間国語だったんだけど算数になっちゃったの。何かドラマみたいでさぁ…初めてだよこんな事」

話し終わると綺麗に並べられた林檎の一つをはい、と渡してきた。

「えっと、倒れること今まで何回かあったから…」

言葉を考えながら小さな声で話すと言うより元々声は小さく、細い。

まぁ、貧血で倒れた後だから、なおさらか。

「へえ、じゃあ大変だ。これからも気を付けないとね」

さすがクラス代表でお見舞いに来てくれただけある。と思った。だってそんな事は気にせず、私を気遣ってくれているのだから。

「有難う。」

そしてそう思うと、不思議と緊張感が和らいでいった。

「そうだ、お名前・・」

「あれ、まだ言ってなかったっけ。亜佐美、山田亜佐美。皆からはあっちとかやまだんとか呼ばれてるけど、呼び方なんて何でも良いよ」

林檎を美味しそうにほおばりながら、「京子ちゃんのことは何て呼べばいい？」と聞き返す。

「何でも良いよ」

そう言えば今の今まで、私にはあだ名というものが無かった。それは仲の良い友だちがいなかったのと、自身そんな事どうでも良かったのかもしれない。

「じゃあ、家で考えてくるね」

だからこの時の亜佐美の言葉は、痛いくらいに嬉しかった。

（次号に続く）

「満員電車」　第二回

連

次の日は休日で二日ぶりに登校した。今日の電車はいつもより混雑していた。彼女の姿は見えない。何回も辺りを見回した。その時僕の制服の裾を引っ張る手があった。

「おはよう。今日いつもより人多くない？」「うん」…会話が続かない。「桜坂さんは…」

「いいよ！そんなよそよそしくなくて、美華でいいよ。私も葵って呼ぶし！」

「…美華は人気者だよね。」

「どうしたの？いきなり。」僕は思わず口をつむいだ。いきなり変なことを聴いて彼女に変に思われてしまったと思った。「いや…あの…いつも美華の周りには友達がいて良いなって…。僕なんてクラスであんまり話さないし。クラスの人に変な印象しか残ってないし。こうやって自分で分かってて何もしない僕が嫌になる。でも…私、葵のいい所知ってるよ？昨日、実は電車の中で見かけたんだ。見てたよ？お婆ちゃんに席譲ってたの。」

彼女が言ってることは当たっていた。昨日は死んだ母の誕生日だった。電車で一時間くらいの所に事故で亡くなった母と、風邪をこじらせたまま亡くなった父が眠る墓がある。そこへ行った帰り道に老人に席を譲った。そこを見ていたのだろう。「一人でどこ行ってたの？」「墓参り」彼女に父と母のこと、今一人暮らしをしていること、すべて話した。何の抵抗も無く。

すべて話し終わるとすごくすっきりした。彼女は下を向いたまま動かなかった。「美華？もしかして泣いてる？」「…話してくれて有難う。そっか…」彼女が近づいてきた。とても暖かかった。

（次号に続く）